

# これからの臨床検査技師が進むべき道

AI 社会の中で臨床検査技師は残るのか、微生物検査の歴史と、人にしかできない仕事

◎小松 方<sup>1)</sup>

天理大学 医療学部<sup>1)</sup>

## 1. 技術の進歩は「役割の変化」である

AI 社会の到来により、「臨床検査技師は将来も必要なのか」という問いを耳にする機会がある。微生物検査は、自動化・遺伝子解析・AI 画像診断の進歩により、転換点を迎えている。試験管と培地を中心に行われていた検査は、MALDI-TOF MS・PCR・NGS 解析へと発展し、コッホの時代とは異なる概念へと進化した。これは「技術が奪われる」というより、「役割が変化している」と捉えるべきであり、その視点の転換こそが発点となる。新技術が登場するたびに「基礎技術は不要になる」と語られてきたが、MALDI-TOF MS が登場した際にも、同様の議論が学会レベルで交わされた。しかし現場を支え続けてきたのは、原理を理解し、異常に気づき、患者背景を読み取ることができる技師であった。

## 2. 「解釈し、伝える」ことは人間の役割

MALDI-TOF MS や遺伝子検査・自動感受性機器が普及した今も、結果をどのように解釈し臨床へ伝えるかは人間の役割である。近年では SBAR (Situation・Background・Assessment・Recommendation) を用いたコミュニケーションが重視されている。「グラム陽性球菌が出ました」と伝えるだけでなく、患者背景・感染リスク・抗菌薬使用状況を踏まえ、何を提案し何を依頼するかが問われる。抗菌薬適正使用支援においても、handshake stewardship のような対話型介入が注目されており、そこには、現状の AI には再現が難しい、人間同士の信頼関係や摩擦、その場の空気感が存在している。

## 3. 対話とは、価値観を擦り合わせる営み

学生は Z 世代、今後は α 世代へと移行していく。SNS が当たり前の時代に育ち多様性や合理性を重視し、「正しさ」を強く主張しやすい傾向もある。組織では「自分が正しい」という考えを貫きすぎると摩擦が生じる。対話とは論争ではなく、異なる価値観を擦り合わせる営みであり、自らの価値観が変化することも受け入れる姿勢が求められる。臨床検査技師の強みは検査技術だけではない。研究思考・多職種連携・感染管理・現場調整能力も重要な要素であり、抗菌薬適正使用支援やセレクトィブレポートは、検査結果の報告にとどまらず、臨床を変える行為でもある。木の枝先ばかりを

見て根を忘れてはいけない。微生物検査の根底には、「患者を診る」という原点が存在しており、その視点こそが技師としての価値を支えている。

## 4. 個人技から組織力へ

AI には「身体性」がない。人と人との信頼形成・葛藤・習慣形成・組織文化の理解は、人間の領域である。人間の習慣形成には感情や経験が深く関与しており、教育やマネジメントにおいても、「怒らない」「相手に応じて伝える」という姿勢が重要になる。少子化と医療人材不足が加速する中、一人の優秀な技師だけで職場を変えることは難しく、組織の理解と協力がなければ継続できない。「個人技」だけでなく「組織力」が問われる時代であり、give and take ではなく take and take の風潮が強まれば組織は疲弊する。だからこそ、組織を牽引し文化をつくるリーダーの存在は、これまで以上に重要な意味をもつ。

## 5. AI と共存する、人間にしかできない価値

AI 時代において臨床検査技師が生き残る条件は、「AI に勝つこと」ではない。AI と役割を分担し、人間にしかできない価値を高めることである。検査値を出すだけであれば AI は強力だが、人の不安を受け止め、現場を調整し、多職種をつなぎ、若手を育て、組織文化を醸成していくことは人間にしかできない。臨床検査技師は、技術と人間性の両輪で成り立っている。微生物検査の未来とは、技術進歩と人間力を再定義していく時代なのではないだろうか。

## 演者略歴

### 【学歴】

1992 年 天理医学技術学校 卒業  
2003 年 大阪大学大学院医学系研究科 博士後期課程修了、博士（保健学）

### 【職歴】

1992 年 天理よろづ相談所病院 臨床病理部 入職  
2006 年 ファルコバイオシステムズ総合研究所 担当課長  
2012 年 天理医療大学 臨床検査学科 准教授  
2017 年 同学科 教授  
2021 年 同学科 学科長  
2024 年 天理大学 医療学部 学部長